

『旅をする本』の物語 ～星野道夫歿後二十年～

井上清彦

夏の終わりの朝、ツクツクホウシの鳴く声が聞こえる。八月も、もうすぐ終わるよ、と告げているようだ。

それは、毎月第四土曜日に地元で開催される「おとこのおしゃべり会」の席のこと。最年長八十六歳の原田さんから「皆さん、星野道夫をご存じですか。私は、かつて星野道夫に惹かれてアラスカを旅したことがあります。先日、テレビで放映された『旅をする本』の物語」という番組の録画ブルーレイを持ってきました。没後二十年の展覧会が、八月末に銀座松屋で開催されます。

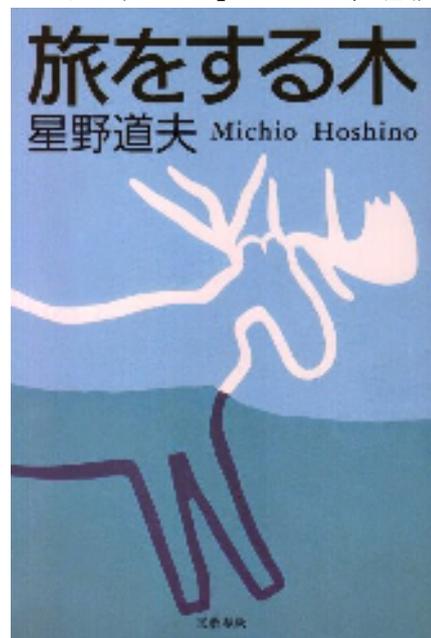
これを聞いた私は「それって『旅をする木』の間違いじゃないですか。本を読んだことあるので、お借りしたい」と他の人を押しのけた感じで申し出た。すると原田さんは、「その疑問はご覧になれば分かります」と微笑を浮かべ答えた。

帰宅し、早速、録画を見ると、直ぐに疑問が解けた。星野道夫の著書『旅をする木』を読んだ人が、旅先のスペイン・カディスで「この本に旅をさせてやってください」と、文庫本の裏表紙に書いて、さらには、本のタイトル『旅をする木』の「木」に、短い横棒を付け、『旅をする本』として、バックパッカーに託したのだ。

番組では、この本の現在の持ち主である、歩いて北極点を目指す冒険家から遡って、本の裏表紙に書いてあった名前と本を読んだ場所をたよりに、その軌跡をたどる。ぎりぎりの荷物の中に、この本を「お守り代わり」に入れ、冒険の途中、本を開きます。若い時にヒマラヤ登山で仲間を失い、苦悩のなかにある六十過ぎの写真家は、この本に救われ、南極隊のサポートを続けることに生きがいを見出す。バンコックの古本屋で、この本を見つけた国際学術支援を行う大学職員は、友人の南極圏微生物の生態学者である若い女性に送る。その女性は、遺伝でいつ発症するかわからない不治の病だと医師に告げられており、生きる意味を失っていた時に、この本の文章に励まされ、アラスカを訪れ、生きる勇気を取り戻す。

番組は、探偵小説みたいな展開で、最後には、学生時代に、世界一周の旅先で『旅をする本』を仕掛けた、名古屋に住む技術者の青年を探し出す。

この本は、欧州、東南アジア、南極、北極、北米等、既に十人の日本人に渡り、地球四周分を旅している。手にした人に相応しい章があり、感動と生きがいを呼び起こしながら、今も、世界のどこかで旅を続けていることでしょうかと結んでいた。



残念なことに星野道夫は、二十年前の夏、カムチャッカで取材中、熊に襲われ亡くなった。享年四十三歳。亡くなった後も、彼の写真やエッセイは、若い人を始め多くの人々の心をとらえて離さず、まだ見ぬ場所への旅をいざない、想像の翼を拓けてくれる。

私がこの本に巡りあったのは、二年前の夏で、新聞の本の紹介欄に、この『旅をする木』があり、すぐ、近くの図書館で分厚い単行本を借りた。写真家の星野道夫は、アラスカを舞台に、その大地、動物、植物、そこに暮らす人々を被写体にした素晴らしい写真で知っていた。本に目を通すと、写真はどこにもなく、訪れた場所の自然や、人々との交流を綴ったエッセイを集めた本だった。



氷上で遊ぶワカウカウ



北極で輝くオーロラと満月



動物が生きるために育まれたシオンフォレスト



夕暮れに極寒の湖を渡るカリブー



草原に遊ぶグリズリーが完全に輝く



タンラの骨の遺跡

撮影：星野道夫

最初の章「新しい旅」の、如何にしてアラスカに魅せられたかを読んで、その内容と詩情あふれる瑞々しい文章に引きこまれ、一気に読んだ記憶がある。

残暑が厳しい八月下旬のある日、「没後二十年特別展『星野道夫の旅』」を見るために銀座松屋に足を運んだ。開催二日目だったが、彼のファンが多いのか、老若男女の人々の数は思ったより多い。会場では、アラスカを舞台にした大きく引き伸ばされた写真が、目の前に迫ってきて息をのむ。



悠久の大地に、たくましく息づく生命、果てしない大地を横切るカリブーの大群、可愛らしい北極熊の赤ちゃん、ハワイ沖とアラスカ沿岸を周遊するクジラの勇姿。その大地に、太古から足跡を残す人々の暮らし。どれを見ても、ファインダーを当てた星野道夫の思いが伝わってくる。加えて、ところどころに掲げられた言葉、なかには『旅をする木』で読んだ言葉があり、写真とともに読むと、胸に迫るものがある。

歿後二十年の夏、文庫版を購入し、もう一度読み始めている。感動の録画と展覧会を見た後、改めてその言葉に魅せられている。

立秋を過ぎ、時折涼しい風が吹き始める夏の終わりの、この季節が好きだ。過ぎ去りつつある夏の思い出に、星野道夫への想いが加わった。

いつかアラスカの大地に立ち、吹く風を感じる日を夢見ながら。

2016年8月30日

アラスカの写真および略歴は「歿後20年 特別展 星野道夫の旅」パンフレットおよびpost card より

星野道夫

[1952年] 千葉県市川市に生まれる。

[1971年] 慶應義塾大学経済学部入学。探検部に入る。

[1973年] アラスカ・シシュマ

レフ村でエスキモーの家族と一夏を過ごす。

[1976年] 慶應義塾大学卒業。動物写真家 田中光常氏の助手を経て、アラスカ大学野生動物管理学部に留学。以後、アラスカの自然と動物そして人間をとり続ける。多くの国内誌をはじめ、「ナショナル・ジオグラフィック」「オーデュボン」などに作品を発表。

[1986年] 第3回アニマ賞受賞

[1990年] 第15回木村伊兵衛写真賞受賞

[1996年] 取材先のカムチャツカ半島クリル湖畔でヒグマの事故により急逝

[1999年] 1999年度日本写真協会賞・特別賞受賞

